

On the Welsh Arthur (2): From the 'Lives of the Saints' (*Vitae*)

Setsuko Nakano

中世ロマンス文学の中で華々しい活躍をするアーサー王が、ウェールズのケルト人の族長アルスル (Arthur) から始まっているということは、大方認められている事実である。そしてウェールズ地方に残されている歴史の文献と詩や散文物語の中に、その多様なイメージの断片を探ることもできる。いずれも猛々しい戦士たちの長として登場し、一つの集団を率いる指導者の姿を彷彿とさせる。ウェールズのアルスルの活躍した5世紀から6世紀というのは、日増しに高まってくるアングロ・サクソン族の力の前に、ブリトン人の結束が必至となった時代でもあった。そして興味深いことには、こんなアルスルの時代と、イングランド南西部のウェールズ、並びにフランスのブルターニュ地方と広く活躍した聖人たちの時代とが、ぴったり重なってくるということである。勇猛果敢な戦士たちの統率者アルスルとキリスト教の普及に身を捧げた聖人たち、この二つのイメージの重なるところに焦点を絞って、主としてラテン語で書かれた数々の聖人伝 (*Vitae*) の文献の中から、ウェールズのアルスル像の別の側面を探ってみたい。

I ウェールズのキリスト教

もともと自然宗教的な多神教であったウェールズのケルト人たちが、砂漠地帯の厳しい一神教から始まったキリスト教の洗礼を受けるのは、いつごろからのことであったのだろうか。

ウェールズ地方の歴史をふり返ってみると、この地がローマ帝国の支配下に置かれるようになったのは紀元43年頃からのことであり、それ以後ゆるやかなローマの支配が約350年続いたことが分る。ローマ本国の動乱の勃発でローマ人たちがブリテン島を後にするのは、4世紀後半になってからのことである。その間ローマの軍人たちの駐屯地、例えば北ウェールズのカナーヴォンにあるローマの砦セゴンティウムや南ウェールズのカエルシオン・アル・ウイスク (カエルレオン)、コルチェスターのローマ人たちの砦イスカ等を囲むようにして、二つの民族の共存生活が営まれていた。「統治すれども君臨せず」をモットーとしたローマの植民地政策の下で、ローマの軍人たちと地元のケルト人の娘たちの結婚等により、平和裡にローマとケルトの混血が進み、多くのローマ人がウェールズに定住して日常生活を営むようになる。最初のうちは激しい迫害の対象となっていたキリスト教が、初代のキリスト教徒の大王と呼ばれたコンスタンティン大帝 (Constantine the Great: 306-37) の誕生等によって、ローマの国教として認められるに伴い、自然宗教を信奉していたケルト人の間にも、キリスト教が広められていった。こんな過程を経て、ウェールズ西部の地に、盛んにローマ・カトリック教会が設立されるのである。

一方ヨーロッパ大陸においては、ローマ帝国の崩壊と北ヨーロッパからの異教徒の侵攻で、せっかく社会的な認可を受けるようになったローマ・カトリックの力が脅かされてゆく。ブリテン島においては、アングロ・サクソン族の南下と東部地方への定住化が進み、彼らへのキリスト教布教の

必要が起こってくる。完全な異教徒であった彼らへの恐怖が、ケルト語話者であるウェールズ人と、ヨーロッパ大陸からやってきたキリスト教徒をしっかりと結びつける要因となったとも考えられる。大陸から伝えられたキリスト教の影響が、主にウェールズの南西部で顕著になってゆくには、こうした歴史の必然があったのである。

しかしながら当然のこととして、ブリテン島とアイルランドの地、すなわちケルト人たちの地に広がっていったキリスト教には独自の特徴があった。砂漠の厳しい一神教は、十字架に光輪を重ねたケルトの十字架に象徴されるように、自然と農耕を重んじる平和な宗教へと変身したといったからである。

ブリテン島に係わりを持つキリスト教布教の最初の指導者の中には、ハーフォードシャー (Herefordshire) 南部とグラモルガン (Glamorgan) のスアンイシイテッド・ヴァウル (Lanilltud Fawr) に創立された僧院と深いつながりをもつ聖デヴリッグ (St Dyfrig) がいる。彼はハーフォードシャーの一部となっているエルギング (Erging) —今のアーケンフィールド (Archenfield) —のペイビアウ (Peibau) 王の娘エルブデイル (Erbdil) の息子として生まれている。彼の弟子の一人聖イシイテッド (St Illtud) によってこの地に設立された教団学校がブリテン全土に有名になり、やがてサムソン (Samson)、ギルダス (Gildas)、そしてウェールズの守護聖人として崇められるデイヴィッド (David) 等もまたこの僧院で修行し、熱心な布教活動を展開して、後に聖人の時代と呼ばれる礎を築くことになる。伝説の伝えるところによると、アルスルの父ウーセル・ペンドラゴン (Uthr Pendragon)、そしてアルスル本人の戴冠 (518年、カエルレオンで) を取り仕切ったのも、アルスルの甥に当たるこの聖デヴリッグであったということである。

一方北ウェールズでは、ケルイド (Clwyd) のバンゴル・イスコイド (Bangor Iscoed) の地に大きな僧院を構えた聖デイニオル (St Deiniol) 等を中心に、キリスト教の僧たちの積極的な布教活動が展開されてゆく。デイニオルは、スコットランドのストラスクライド (Strathclyde) で、北ブリトン人の王のコエル・ゴデボグ (Coel Godebog) 一家に生まれ、6世紀前半に、北ウェールズにやってきたと言われている。525年、カドワッソン (Cadwallon) 王から寄進された土地、メナイ・ストレイツ (Menai Straits) のバンゴル・ヴァウル (Bangor Fawr) に定住して、僧院活動を行なった。スアンデウィ・ブレヴィ (Llandewi Brefi) での教会会議に列席し、その際聖デイヴィッドから、バンゴル・ヴァウルの僧正に任命される。彼の遺体は、聖人の島と呼ばれるバーゼイ・アイル (Bardsey Isle; ウェールズ語でイニス・エンスイ (Ynys Enlli) に葬られている。グイネッズ (Gwynedd) のバンゴルの地には、彼の功績を讃えた大寺院が建立されている。

このような僧院では、エジプトの地で盛んになった聖アンソニー (St Anthony) とその使徒たちに代表されるような、厳しい修行が行われていたともいわれている。なかでも聖シメオン (St Symeon) が、円柱の上に設けられた台座の上で雨風に晒されながら行なった、33年間にわたる立ち業の修行のさまなどが語り伝えられている。こうして西暦550年以降、ウェールズの地では、修行僧や聖人による、一般の人々へのキリスト教布教活動が、盛んに展開されてゆくのである。

彼らはスアナイ (llannau) と呼ばれる土地を有して、自給自足の生活集団を形成し、祈りと労働の共同生活を送っていた。初期の多くのそんな僧たちの名前が、ウェールズの地名として残っている。例えばケビ (Cybi) の僧院があったところが、現在のスランゲビ (Llangybi) という地名として残っているといたふうである。しかしこれらの僧たちは、必ずしも自分たちの創立した僧院の中にだけ留まっていたばかりではなく、多くの場合、広く旅をしながら布教活動を行なう生活を送っていたと考えられる。こうして彼らは、アイルランドやブルターニュやコンウォールのケルト人仲間たちと、親しい交わりを持つようになってゆく。そんな彼らの一生のさまが、数々の「聖人

伝」(Vitae)の中に残されているのである。しかしながらここで注意する必要があるのは、サムソン伝以外の聖人伝は、全て1066年のノルマン征服(Norman Conquest)以後書かれているという事実である。執筆の時代は、実際の彼らの活動時より既に500年以上が経過した後のことであり、口伝のかたちで語り伝えられてゆくうちに大いに美化され、教祖的な神秘のヴェールに包まれた、聖人たちの一生の物語になっている。もう一つの特徴的なことは、ウェールズ地方出身の聖人たちは、アングロ・サクソン人の改宗にそう大きな関心を示さなかったということである。あくまでも彼らの関心は、アングロ・サクソン人と果敢に戦うことを余儀なくされていた、同胞のウェールズ人の改宗にあった。このような背景から、597年、西方ローマカトリック教会の偉大な改革者、教皇グレゴリー I 世(Pope Gregory the Great; 590-604)が、彼の最高の使徒聖アウグスティン(St Augustine)を、南部サクソン人の改宗の宣教活動に赴かせるというような試みが、積極的に開始されてゆくのである。しかしこうした布教活動が、ウェールズ地方のクリスチャンたちとの間の軋轢を生むことともなったと考えられる。結果として、ウェールズ教会がローマカトリック教会の権威を認めるのには、いささかの時間を必要としたからである。そしてまた、ごく早い時代から始まったこうしたローマ教会との軋轢が、中世初期から中期にかけて、ウェールズ教会が英国国教会(Anglican)の総本山となったカンタベリー(Canterbury)教会の支配を、長いこと拒否したという事実にまで結びついてゆく。アルスルの指揮の下でも、容易に結束しようとはしなかったウェールズのケルト人たちの、中央集権化を極端に嫌うという一種独自の行動様式が、このような教会活動の中にも顕著に現れているのが分かる。

II エレン・ルイズォグ(Elen Luyddog)と北の人キネッサ(Cunedda)の一族

1. エレンとマクセンの一家

『マビノギオン』(Y Mabinogion)に収録されている、「マクセン・ウレディグの夢」('Breuddwydd Maccsen Wledig)の物語は、ローマの皇帝マクシムス(Magnus Maximus)(ウェールズ語でマクセン・ウレディク)と、彼が夢の中で見初めたウェールズの美女エレン(Elen)との結婚をめぐる逸話を語っている。エレンは有力な族長エウダヴ(Eudaf)の娘であった。この物語は、皇帝マクシムスが代表するローマの力と、エレンに代表されるウェールズ的美とが結びついた、半歴史的な物語と解釈されている。三回の繰返しを効果的に用いて構成される物語の見事な語りと相まって、『マビノギオン』の11編の物語のうちでも、傑作の誉れの高い文学作品である。そしてまた、ウェールズ史の上からみても、極めて興味深い事実を暗示する文献である。

西暦383年、マグヌス・マキシムスは、皇帝グラティアン(Emperor Gratian)に反逆を企て、一旦は彼を殺して自ら皇帝を名乗り、ゴール、スペイン、ブリテンを統治する。しかしイタリア侵攻に失敗し、383年にテオドシウス(Theodosius)によって、アクイレイア(Aquileia)の地で倒される。彼と共に、ブリテン島から多くのローマ軍団がゴール地方のゴート族制圧のために離島し、その結果として、北からのピクト、スコット、アングル、サクソン、そしてジユート族の進入をもたらすこととなり、ブリテン島の平和が乱されたという史実がある。このゴール地方から、僧院運動がブリテン島に導入されるのであるが、それにはマキシムスの妻エレンの存在が大いに関わっていたといわれている。夫と共にゴール地方に赴いたエレンは、その地でヨーロッパにおける僧院活動の先駆者、トゥール出身の聖マーティン(St Martin)と親交を結ぶことになった。マーティンは度々マキシムス夫妻の宮廷を訪れ、この地で行なわれた不正の申し立てをしたり、人々の保護を要請したりした。夫マキシムスは、戦闘的でない僧マーティンとの交流に魂の安らぎを得ていただろうし、妻エレンにとって神との生活を探究するこのような僧は、それまでには会ったこともない

新鮮な存在であったに違いない。そして彼らの息子たちは、貧しい乞食にまで暖かい救いの手を差し伸べ、動物でさえも彼の保護を求めてその庇護の下に集まる僧マーティンの生き方から、軍人の生活とは異った多くのことを学んだことであろう。何よりも脅威的な事実、一見穏やかなマーティンと彼に従う僧の集団が、武器を使うことなく、その行動と説教で無知な異教徒であったゴールの人々を、神の恩恵を感謝して熱心に働く、穏やかな農民へと変えてしまうことであったと思われる。こうして始まったエレンの一家と僧マーティンの交際は、マキシムスの死後も変わらずに続いたことが想像される。

388年に夫が亡くなると、エレンは残された息子たちを伴ってウェールズに戻って行った。そしてその際、聖マーティンや聖デイヴィッド (St David) 等に代表される僧院活動もまた、ウェールズに紹介されたと思われる。エレンと息子たちは一致協力して、アイルランドの地から進入し、既にウェールズの地に定住しつつあったスコット族と果敢に戦った。『マビノギオン』の物語によると、マキシムスとの結婚の際、エレンは自分のために三つの要塞を、それぞれカナーク、カマーザン、そしてカエルレオンの地に建てさせ、父エウダヴには三つの島、すなわちワイト島、マン島、そしてオークニー諸島を手に入れさせている。エレンの故郷であったスノードン地方の砦ディナス・エムリスから、カエルレオン、カマーザンの南の砦まで、これらL字型に建てられたこれら三つ要塞を拠点として、全ウェールズを掌握するという野望の実現が始まった。その際大いに役だったのは、各地に建設された「ヘレン (ウェールズ語ではエレン) の道」(Sarn Heren) と呼ばれる、直線のローマ街道だったと考えられる。人々はローマ風の戦車を駆って、この直線道路をひたはしるエレンの姿を、たびたび目撃したという。長男のコンスタンティン (Constantine) はスノードン地方を、そして他の息子たちはウェールズの南西と南東地方を、そして娘は中部ウェールズとポウイスを治めていたブリトン人の王ヴォーティガン (Vortigern; ウェールズ語でグルセイルン (Gwrtheyrn)) と結婚するというように、まさにエレンの子どもたちが、着々とウェールズ全土をその勢力下に置いていったのである。既にローマ帝国の強大な力が衰えていたウェールズの地で、エレンの一家は、父方のローマの血筋と慣習を誇るべきものとして堅持しながらも、ブリテン島独自の統治様式を採用した。こうしてマキシムスとエレン、ローマとウェールズの混血のこの一家が、以後数百年にわたって、ウェールズを支配する強力な一族の一つとなる。エレンの子どもたちの一人ペブリク (Peblig) が、スノードン地方の山々に囲まれた地に小さな教会を建て、何人かの僧と暮らした跡がスアンペブリグ (Llanbeblig) として今も残っている。たぶんこれが、キリスト教の修行者たちが共同生活を営んだ地ースアン (llan) ーの最初の例と考えられる。聖マーティンの熱心な信奉者であったこのペブリクの例に倣うようにして、以後300年間にわたって、このようなキリスト教の僧たちの共同生活の地である僧院指導者の名を冠した教会が、ウェールズ各地に形成されてゆく。やがて教会布教活動に尽力した有力者たちが人々の間で聖人と崇められ、各地で彼らの一生の物語が語り継がれて、聖人伝 (*Vita (e)*) と呼ばれる独特の文学型式が生まれたと考えられる。

一方で、12世紀と13世紀のウェールズの手書き者たちによって、このセゴンティウムのエレンと最初のキリスト教徒皇帝となったコンスタンティヌス大帝 (288? - 337) の母聖ヘレン (St Helen) とを結びつけようとする努力が行なわれる。聖エレンはコルチェスターの名祖と思われるコール王 (King Cole of Colchester) の娘で、エルサレムで本物の十字架を発見した人物であるともいわれている。しかしこのエレンが、ブリテン島にやってきた形跡はなく、時代的にいってもセゴンティウムの「軍勢を率いるエレン」 ('Elen Luyddog') と同一視するのは無理である。

2. 北の民キネツザの一家

エレンとマキシムスの息子たちの活躍にもかかわらず、4世紀の終わり頃まで、西部海岸に絶え間なく侵攻を繰り返していた、アイルランドからやってくるスコット人を阻止するための、有能な兵士たちの存在は決して十分とはいえなかった。そんなとき、多分5世紀の中頃、ローマの司令官ステイリッチョ (Stilicho) (ウェールズの統治者ヴォルティゲルンであったともいわれる) の要請に応じて傭兵として南下してきたのが、キネツザ (Cunedda) に率いられた、ゴドズイン (Gododin) 族の兵士たちである。キネツザ自身、もともとはローマ人のために、南スコットランドの地を治める有能な軍人であり、熱心なローマン・ブリトンのキリスト教徒でもあった。よく訓練された軍隊を率いて、アイルランド海を南下してやってきたキネツザは、次々にスコット人を追い払い、ウェールズ北部、西部、そして南部の海岸を抑えてしまったのである。その勇猛な戦いの様子は、ウェールズ文学の始まりを告げる詩人アネイリン (Aneirin) やタリエシン (Taliesin) の古詩のなかにも歌われている。このようにして南下してきた「北の人々」 ('the Men of the North') がそれ以後このブリテン島に定住し、キネツザの息子たちとその子孫が、ディー川の河口からデイヴィ川の河口までの地を支配するようになってゆく。メリオネス (Merioneth) とカーディガン (Cardigan) というのは、キネツザの8人の息子たちのうちの二人の息子の名を採った地方である。また一説によると、後にウェールズの守護聖人になる、6世紀頃の西部地方出身の聖デイヴィッドや、彼の敵対者として描かれるマエルグン・グイネツズ (Maelgwn Gwynedd) も、依然として勢力をふるって活躍を続けていたキネツザの、沢山の曾孫の一人であるといわれている。この時代になると、ゴールの地では、聖マーティンによって始められた様式を継承する教会活動が、ローマの支配の影響から独立して別個の歩みを遂げ、ウェールズの地にある人びとの教化に積極的に取り組む動きが生まれていた。一方411年から418年までのヨーロッパのキリスト教界では、原罪と聖なる恩恵を授与する場所としての教会の権威を主張するヒッポ出身のアウグスティン (Augustine of Hippo) に反対を唱えて、「人は己の行動に責任があり、その自由意思で、魂の救済のために努力すべきだ」と主張するペラギウス (Pelagius) の意見とが存在し、激しい論争を繰り広げていた。その結果、最終的には教会と国家の後ろ楯を得たアウグスティンが勝利し、敗北を帰したペラギウスは異端の誹りを受け、その一門は追放されるという憂き目を見ていたのである。エレンと共にウェールズに渡ってきたのは、そんなペラギウス派の教えであったろうと推定される。

このように、それぞれ北と南を中心としてウェールズ統治を試みた二つの一家、エレンとキネツザの子孫の中で最も目ざましい活躍を行なったのが、王や将軍といった軍事的指導者ではなく、専ら「スアン」という独自の共同体での布教活動を行なった聖人たちだったという事実は、注目に値する。

聖人たちが亡くなった日は彼らが神の治める平和な国へ生まれた日と考えられ、その祝祭日には、新たな再生を祝っての様々な行事が催されていた。そしてそんな祭典の際、彼らの一生を物語る伝記が、教会説教の中で読まれていたと考えられる。こうしてウェールズ地方では、族長アルスルの武勇伝と並んで、このような聖人たちの行なう奇跡物語が、代々人々の間で語り伝えられ、庶民の口承文学の中の花形となってゆくのである。

聖人伝をつたえる文献には、主として次の三つが考えられる。

1) ギルダス (Gildas) の『ブリテン崩壊記』 (*De Excidio Britannae* : 547年頃)

ギルダスは、西暦500年から570年頃活躍したブリトン人の僧。彼の残したウェールズ教会と国家の指導者を糾弾したこのラテン語の書は、聖人の活躍を見た同時代に書かれた、唯一の文献である。

2) 『スタンダフの書』 (*Liber Landavensis*)

『テイロの書』 (*Book of Teilo*) と呼ばれるこの文献は、グラモルガン (Glamorgan) のスタンダフ大寺院に残されている権利証書台帳兼記録簿で、主要な大僧正や寄付譲渡証書等、ノルマン征服以前の、南東ウェールズの教会関係の動きが垣間見られる興味深い情報が記録されている。スタンダフ大寺院の増築・再建にあたって、アーバン僧正 (Bishop Urban) が収集した記録を、12世紀の後半、何人かの書写生が書き留めたものと考えられている。スタンダフ大寺院の基礎を敷いたとされる5世紀後半に活躍したデヴリイグ (Defrig) から、6世紀のテイロとエウゾグウィ (Eud-dogwy) といった三人の聖人たちの一生の物語を含む。

3) 聖人たちの一生を書き留めたラテン語文献

それらのうちの『聖サムソン伝』以外は、すべてノルマン征服以後に書かれたものである。

『聖サムソン伝』の成立は7世紀頃、続いて古いと目される『聖デイヴィッド伝』が、1090年頃、リゲヴァルフ (Rhigyfarch) によって書かれたと推定される。

Ⅲ. 聖人伝 (*Vita(e)*) の中から

5世紀から6世紀にかけて、ウェールズでは多くの聖人たちの活躍が記録されている。まさに聖人の時代であったといつてよい。一体この時代に、どうしてこのように多くの聖人たちが出現したのだろうか、そしてウェールズにとっての聖人というのは、どんな意味をもつ存在であったのだろうか。そして聖人伝のなかに現れるアルスルの姿はどんなものであったのか。何人かの聖人たちの一生を、アルスルとの係わりに目を配りながら、聖人伝の中に探してみたい。

1. 聖デイヴィッド (St David)、またはデウ・サント (Dew Sant)

ウェールズの守護聖人となる聖デイヴィッドの一生は、11世紀の末頃書かれたと推定されるリゲヴァルフ (Rhigyfarch) の『聖デイヴィッド伝』 (*Life of St David*) から、その概略を知ることができる。しかしながらこの著名な聖人に関する逸話は枚挙のいとまがなく存在し、その真偽のほどは定かではない。

デイヴィッドは、462年頃、現在のカーディガンシャーのあたりを治めていた、カレディギオン (Ceredigion) 地方の王ケレディグ (Ceredig) の息子サント (Sant) を父として生まれている。母親ノン (Non) については、尼僧であったこと以外はあまり知られていない。しかし彼の誕生は、アイルランドの守護聖人パトリックに、30年前にすでに予告されていたといわれている。すなわちウェールズの地への宣教を思い立ったパトリックに、神の啓示が下り、その地の宣教はこれから30年後に生まれるデイヴィッドに任せるようにと指示されたというのである。デイヴィッドは最初アベラエロンの南ヘン・ヴェネウ (Hen Fynyw) の地で教育され、後にスタンデウサント (Llanddeusant) の聖パウリナス (Paulinus) のところで修行した。グラストンベリーやクロイランド (Croyland) に教会を建てたり、バースの地で温泉を湧かす奇跡を行なったりしながら、南ウェールズと西イングランドで、数々の僧院を建立して回ったといわれる。やがてアイルランド人の族長ボイア (Boia) を破って、グリーン・ロシン (Glyn Rhosyn) の地に定住する。師パウリナスの視力を回復させた奇跡や、彼の弟子モドムノク (Modomnoc) と蜜蜂の逸話等がよく知られている。聖テイロ (St Teilo) と聖パダルン (St Padarn) を伴ってのエルサレムへの巡礼の旅の逸話も語り伝えられており、その際聖デイヴィッドは大僧正に任じられ、携帯用の祭壇、鐘、羊飼いの杖、そして金糸で織られた外衣が贈り物として与えられたといわれている。また彼の説教は多くの聴衆をひきつけ、スタンデウブレヴィ (Llandewbrevi) の教会会議における説教の際には、その姿を一目でも見たい

という聴衆の願いに答えて、デイヴィッドが一枚のハンカチを地面に広げてその上に立つと、地面が盛り上がり、小高い丘となり、そこから説教をする彼の姿が、全聴衆にはっきりと見えたともいわれている。また彼の説教の間中、白い鳩がその肩にとまっていたとも伝えられている。彼の名をとどめる教会が、南ウェールズ全土と遠くハーフォードシャーの地まで残っていて、その活動の広さと人気の程がしのばれる。しかしここで注意しておきたいのは、この聖人伝を書いたリゲヴァルフの父スリエン（Sulien）は聖デイヴィッド教会の僧正であり、カンタベリーとノルマン教会からの独立を主張するためにも、聖デイヴィッドの優位を宣伝する必要があったということである。以後、バリ出身のゲラルド（Gerald de Barri）（ラテン名でゲラルダス・カンブレシス：Geraldus Cambrensis）の著作を皮切りとして、ラテン語とウェールズ語での数冊の聖デイヴィッド伝が書かれている。

12世紀以降になると、彼の名はウェールズきっての聖人として、南ウェールズ、アイルランド、そしてブルターニュ地方まで伝えられるようになる。1124年と1130年に書かれたローマ法王への書簡には、聖デイヴィッド（デウ・サント）はウェールズの大僧正で、その後継者がデヴリグ（Dyfrig：ラテン名ドゥブリシアス（Dubricius））であると記載されている。同様に、モンマスのジョフリー（Geoffrey of Monmouth）とバリのゲラルドは、彼の主教座が、もともとは聖デヴリグの領地であったカエルスィオン・アル・ウスク（Caerllion-ar-Usk）にあったと認めている。名声が高まるに連れて、聖デイヴィッド大寺院は巡礼の聖地となり、その権威は、1120年に法王カシクタス（Callixtus）によって、彼がカトリック教会の聖人に列せられることにより確立されてゆく。また1398年には、アランデルの大僧正が、聖デイヴィッドの祭日を、カンタベリーの全教区で祝うことを決定している。こうして聖デイヴィッドは、ウェールズ内部の聖人ばかりでなく、広く対外的にもウェールズを代表する聖人として認められてゆくのである。

彼が最後の説教をした際、会堂の中に天使の音楽と芳しい香りが満ちたと語り継がれている。また臨終に当たって、弟子たちには次のような別れの言葉を残したといわれる。

「兄弟姉妹たちよ、喜びにあふれ、あなたがたの信仰と信念を固く保ち、わたしから聞いたこと、見たことの少しを実行しなさい。」

彼は589年頃、グリーン・ロシン（Glyn Rhosyn）の地で亡くなったと推定される。

聖デイヴィッドの祝祭日（昇天日）は、三月一日である。今でもウェールズの人々は、春を告げる黄色い水仙の花を胸に飾って、この穏やかな聖人の徳を讃える集まりを行い、自分たちの守護聖人の日を祝っている。

しかし興味深いことに、同時代人であった聖デイヴィッドとアルスルの関係は、どの文献にも述べられておらず、その一生は両者共に、数々のに神秘的ヴェールに覆われたままであるという共通点がある。

2. 聖カドク（St Cadoc、またはCadog）

聖カドクにまつわる大方の物語は、12世紀の初め頃に書かれた、ヘルワルド（Herwald）僧正の息子リヴリス（Lifris）の『聖カドク伝』（*Life of St Cadog*）の中から知ることができる。この書は後に、スファンカルヴァン（Llancarfan）のカラドク（Caradog）によって、書き直され出版されている。

カドクの活躍の時代は5世紀の半ば頃、当時の多くの宗教界の指導者の一人として登場する。父はグウェンスウグ（Gwynllwg）の族長グウェンスイウ（Gwynllyw）、母はブレハン（Brychan）王の娘グラディス（Gwladys）である。後に、両親とも息子カラドクの努力によって改宗し、聖人に列せられている。伝説に語られるところによると、彼はブリテンから北イタリアのベネヴェンタナ（Beneventana）へ、雲にのってやって来たともいわれている。この地で僧正となるが、ミサの儀

式を独断でとりおこなったことが原因で殺されることになった。しかし数々の奇跡をおこして、次第に彼の名が高まっていったという。ゲスイ・ガエル (Gelli-gaer) とか、カエルレオン (Caerleon) といった南東ウェールズ地方には、彼の名を冠した教会が建てられている。またアングルシー、コンウォール、ブルターニュ、そしてスコットランドにも彼の教会が残され、その中で最も有名なものは、カマーザンシャーとプレーコンシャーのスァンガトク (Llangattock) の教会である。グラモルガンの谷間に作られたスァンカルヴァン (Llancarfan) の僧院は、学問研修の地としても名高い。

カドクの行った数々の奇跡の中でも特徴的なのは、多くの人々を養う奇跡や視力の回復、そして死者を蘇生させるといった種類のものである。いずれもこの聖人の生まれのよさや、修行者としての治癒の力を伝えている。歴史的な人物との係わりでは、聖ギルダスをもてなしたり、アルスルと議論をたたかわせて論破していったという逸話も残っている。その中でも、アルスル関係の逸話としては、次の話が良く知られている。

アルスルが最初に登場するのは、カドクの誕生する以前のこと、彼の父グウェンスイウと母となるグラディスにまつわる話の中のことである。ここではアルスルは、腹心の家臣カイ (Cai) とベドウィル (Bedwyr) と一緒に、丘の上でさいころ遊びをする三人の男たちの一人として登場する。たまたまそこを通りかかった、グウェンスイウの連れていた娘グラディスの美しさに心を奪われ、何とかして彼女を横取りしようとして、供の者たちにたしなめられるといった、理不尽な主人として描かれている。

その後、息子聖カドクとの関係で登場してくるアルスル像も、はなはだ好ましくないものである。あるとき、勇敢なブリトン人の将軍リゲサウク (Ligessawc) は戦闘の際、アルスルの家来の兵士3人を殺してしまい、聖人カドクの庇護を求めてきた。何故ならば、当時アルスルはブリテンの最も傑出した族長として勇名を馳せており、そんな彼を恐れるがあまり、誰一人としてリゲサウクを匿おうとする者はなかったからだった。こうして彼はカドクの保護の下に、7年の月日を過ごした。しかしアルスルは決して追跡をやめようとはせず、カドクは両者の間に立って、仲裁のための協議会を催すことに決めた。各地から招集された評議員の出した結論は、ブリトン人のしきたりに則って、兵士一人につき、雌牛百頭分の支払いで決着をつけようという提案であった。しかし横柄な専制者アルスルは、その雌牛自体にいちゃもんをつけたのである。すなわち雌牛たちはいずれも二色一前身は赤、そして後身は白一の色彩をもつ雌牛でなければならぬという条件であった。困惑する一同の前で、聖カドクの奇跡が行なわれる。彼は若い雌牛を連れてこさせ、それらを全てこの二色の雌牛に変えてしまったのである。しかもアルスルの家来カイとベドウィルが、牛たちの手綱を引いて連れてゆこうとすると、彼らの手の中で牛たちは一束のシダに変わってしまったのだ。さしものアルスルも、その場で自分の非を認め、改宗して神の許しを乞い、リゲサウクと仲直りをすることになったという。こうして聖カドクと王アルスルとの対決は、カドク、すなわちキリスト者の完全な勝利として終わったと述べられている。

彼は560年に亡くなり、その祝祭日は9月25日である。

3. 聖カランノグ (Carannog)

同じリイヴリスの手によって、12世紀に書かれたと推定される『聖カランノグ伝』の中にも、アルスルへの言及が見られる。

聖カランノグは、キネツザ・ウレディグの息子と目されるカルウン・アッブ・ケレディグ (Carwn ap Ceredig) を父として、カーディガン地方に生まれた。若い頃アイルランドに出かけて教育を受け、その後ウェールズへ戻り、ダヴェド地方のスァングランノグ (Llangrannog) に僧院を設け

る。6世紀の中頃、ウェールズ、アイルランド、南西イングランド、そしてブルターニュの地で盛んに活躍したと考えられている。もしも彼が、あのキネツガの息子ケレディグの息子であるとするならば、聖デイヴィッドの叔父にあたる人物である。

当時、ケレディギオン地には、カト (Cato) とアルスルも住んでいた。カランノグはどこから布教をはじめたらよいか思いあぐね、携帯用の石の聖卓をブリストル・チャネルに投げ込んで、それが漂着した所に教会を建立してゆこうとする。このようにして、聖卓に導かれて各地を巡っての宣教活動を展開していたが、途中で聖卓を見失ってしまう。この携帯用の石の聖卓を見つけたアルスルが、それを食卓にして使おうと試みる。しかしその上に物を置こうとすると、物は遠くに投げ出されてしまい旨く行かず、結局そこに教会を建てて、聖卓を祭ることになったといわれている。そのときアルスルはカランノグに、「もしあなたが、蛇をわたしの目の前に出してみせてくれるなら、神の僕であると認めよう」と言い、カランノグは直ちに祈りを捧げ、即座に巨大な蛇を出して見せたともいう。

彼は6世紀中頃亡くなり、祝祭日は五月十六日である。

4. 聖イスイテッド (St Illtud)

彼は5世紀の後半の50年間に活躍した聖人で、ブリテンにおける僧院制度の設立者の一人と考えられている。メリオネスシャーのドルゲッサイ (Dolgellau) や、ブルターニュ地方にも彼の活動の痕跡は認められるが、主として南西ウェールズ地方で活躍していたと思われる。スァンイスイテッド・ヴァウル (Llanilltud Fawr) に僧院を構え、そこからは後の聖人の多くが出たといわれている。7世紀前半に書かれた『サムソン伝』によると、彼はオウクセレ (Auxerre) のゲルマヌス (Germanus) の弟子であったと記され、その厳しい修行ぶりよりは、むしろ古典並びにキリスト教学の優れた学者として知られていた。12世紀頃、スァンイスイテッド僧院の一人の僧によって書かれたと思われる彼の伝記には多くの粉飾がなされていて、歴史的な事実を窺い知ることは困難である。その出身地は、現在のブルターニュ地方のレタヴィア (Letavia) と推定される。また前述のスァンカヴァンのリヴリスの『カドク伝』には、彼の前身が兵士だったとある。

亡くなったのは505年とも525年とも考えられ、自ら予告したとおり、真夜中に、金色の翼もつ鷲の姿をした天使たちが、その魂を天に運んでゆくのが目撃されたと記されている。彼の祝祭日は11月6日である。

グラモルガンのパウリナス (Paulinus) 王の宮廷に留まって、王の宮廷の監督を任されたり、マイルヒオン (Meirchion) 王の領地の一部を与えられて、僧院活動を行なった際の数々の奇跡が伝えられているにもかかわらず、アルスル関連の記事としては、彼がまだ兵士だった頃、従兄弟に当たるアルスル王の宮廷を訪問し、大いに歓迎されたという簡潔なものにとどまっている。当時アルスルは「ブリテンの父」('Father Britain') と呼ばれる偉大な征服者であり、彼の宮廷には、あまたの勇士たちが集まっていたと述べられている。

聖イスイテッドとブルターニュとの関係では、彼がもたらした小麦の種によって、この地に農業が興り、飢饉を免れたという逸話が伝えられている。

5. 聖パダルン (St Padarn)

パダルンは6世紀中頃活躍していたと考えられる人物である。デウィ・サント (St David)、テイロと共に行なったエルサレムへの巡礼の逸話は名高い。12世紀の書かれた彼の伝記に、歴史的事実を探ることに無理があるが、マエルゲン・グイネツズやアルスルにまつわる話には、当時の伝説や背景が伺われて興味深いものがある。もともとパテルナス (Paternus) と呼ばれた人物は二人存在し、それらが混じり合って様々な話に発展していった痕跡も見られる。一人はブリトン出身、

そしてもう一人はウェールズ出身の人物である。

ウェールズのパダルンは現在のアバリストウイスの近くの、スファンバダルン・ヴァウル (Llanbadarn Fawr) に僧院を構え、ケレディギオン地方を中心に活動を展開していたが、次第に聖デイヴィッド (デウ・サント) の教団に吸収されてしまったと思われる。彼の活動を阻止したため、盲目にされてしまったマエルゴン (Maelgon) 王の視力を回復したり、盗賊に切り離された従者の首をもとに戻したりといった、数々の奇跡の逸話が残されている。

聖パダルンとアルスルにまつわる逸話は次のようなものがある。

ある日のこと、海上での活躍の疲れをとろうと、岸辺の庵で休息しているパダルンのところに、あの専制君主アルスルがやってきて、パダルンの着ている外套にことのほかの興味を示し、それを自分にくれるようにと迫るのだった。パダルンは、この外套は邪な人物にはふさわしくないと拒絶する。一旦は帰って行ったアルスルだったが、再び戻ってくると、その地を蹂躪する無法を働いたのだった。それを聞いたパダルンが祈りを捧げると、突然地面が持ち上がり、アルスルは首まで埋まってしまう。驚いて許しを乞うアルスルは、救い出されるやいなやパダルンの前に両膝をつき、自分の守護聖人となってくれるようにと頼んだということである。

彼は550年前に亡くなり、祝祭日は4月15日である。

6. 聖ギルダス (St Gildas)

495年から570年頃に活躍したと思われるブリトン人の僧であり、ラテン語作者でもある。9世紀頃、一人の僧によって書かれたギルダス伝によると、彼は現在のスコットランドのクライドサイド (Clydeside) に生まれ、ブルターニュのヴァネス (Vannes) のリュイス (Ruys) に僧院を構えたと記述されている。デウィ・サント (聖デイヴィッド)、サムソン、そしてパウル等と共に、イスイテッド派の教育を受けたと言われている。彼の辛口の糾弾の書『ブリトン崩壊記』(*De Excidio Britanniae*) には、ベイドンの大勝にもかかわらず、ローマ化されたブリトン教会の権威が、無知曖昧で神を恐れぬマエルグウン等の軍事指導者によって、すっかり蹂躪されていくことへの嘆きと、将来に対する警報が語られる。このような警告に答えて、ウェールズ地方の名家出身の「良き人々」 ('gwr dda') が大量に僧院の隠遁生活に入り、ウェールズの僧院活動の全盛期が始まるのである。

アルスルとの関係では、ギルダスの兄弟が侵攻してきてアルスルに殺されてしまったこと、そしてまたアルスルの妻グウェンホヴァル (Gwenhwyfar) の奪還を求めて、彼がアルスルとメル瓦斯 (Melwas) との間の調停をしたこと等が知られている。

彼は570年に亡くなり、祝祭日は1月29日である。

IV 「聖人伝」の中のアルスル

—キリスト教の迫害者から擁護者へ—

以上見てきた如く、「聖人伝」に見られる、ウェールズの聖人たちとアルスルの関係は、はなはだ険悪なものであったとすることができる。また世俗の力を体現するアルスルと、神の権威を代表する聖人たちの戦いは、ほとんど全ての場合、聖人たちの勝利に帰すというのが定石であった。結局最後には、アルスルは自分の非を認め、聖人たちを通して、神の許しを乞うということになっているからである。このような定式があるとはいえ、アルスルと聖人たちには、多くの共通した特徴が見られる。両者共にウェールズの有力な名家の出身であること、その活躍の時代が5世紀から6世紀というウェールズの混乱期であったこと、そしていずれの場合にも、彼らの活躍が一躍華々しく書き立てられてゆくの、12世紀になってからのことであったという事実である。

12世紀という時代は、内外からの締めつけによって、ウェールズが一つの集合体としての認識を

もつ必要をひしひしとを感じるようになった時期とも考えられる。強力な隣人であるアングロ・サクソン人の軍事王国イングランドに付くか、それとも文化的優位を誇るノルマン・フランス系のカトリック教国に組み入れられるかの選択をする決断を迫られた時代でもあった。この二律背反の政治的決断の際、多くのウェールズの名家は、息子たち娘たちを出家させたり、教会領を寄進したりして、本来は全く世俗とは別の価値体系を有する宗教の力を借りて、一家の富と権力の維持を計ろうとした。競って広大な土地を彼らの子どもたちが指導的役割をつとめる宗教結社に寄進し、「スェン」(llan)と呼ばれる治外法権の所領を増やしてゆくという、保身政策をとったからである。このようにして、ウェールズ各地に、聖人に列せられた彼らの子孫の名を冠する教会が建てられ、僧院活動を中心にした信者の結束の形式が整えられてゆく。他の人々を散々に搾取したり、侵略したりしながら強大化していった有力者の家族は、一方でその分だけ強い罪の意識を持っていたに違いない。罪人の子孫が聖人となって先祖の菩提をともらうといった構図は、世界各地何処にでも見られる。

ウェールズの聖人たちのリストをながめるとき、そこにはキネッサ一家の北の系図と、ローマの力と結びついたエレン一家の南の系図が存在していることに気づく。そしてこの両方の聖人たちの系図には、共通にアルスルが関係してくるのである。そこに描かれるウェールズの英雄アルスルのイメージは、いずれも神の力に齒向かう世俗のヒーローとしての姿である。しかしながら彼の子ども染みた行動と傍若無人の振る舞いは、神の僕という姿をとりながらも、所詮人間の権力心の象徴とも言える名門一家の創造した聖人伝の主人公たちの偽善に満ちた虚偽に対して、きわめて人間的な魅力をたたえた人物であった。そんなアルスルの原イメージを提供する資料の一つとなるのが、ウェールズのケルト人(カムリ)たちの民族的遺産ともいべき、『マビノギオン』物語集に収録された、「マクセン・ウレディグの夢」や「ロナブイの夢」や「キルッフとオルウェン」という伝承の物語の中のアルスルと彼を取り巻く戦士たちの姿である。しかしそんなアルスルも、結局は聖人たちに折伏され、キリスト教の保護者となってゆくという運命をたどる。それはまた、やがてはこのウェールズの地方から発したケルト人の族長アルスルが、広くヨーロッパ各地で、キリスト教を守るアーサー王として活躍する変身ぶりと重なってくるのである。

ウェールズの英雄アルスルと数々の聖人たち、一見対照的なこれらの人々は、実のところ同根の、ウェールズ民族の待望と期待の人物像を呈している。それを証明するかのように、ウェールズ史を紐解くとき、われわれはいかに多くの「帰ってきた英雄アルスル」の姿に出会うことであろう。13世紀の最後のウェールズ王ともいべきスウェリン・アッパ・グルフィッツ(Llwelyn ap Gruffudd)、15世紀の最後の反逆者オワイン・グレンドゥール(Owain Glyndwr)、そして20世紀の労働党出身の英国首相ロイド(ウェールズ読みではスオイドとなる)・ジョージ(Lloyd George)等の人物の出現も、それらのうちのひとつといえるのではないだろうか。

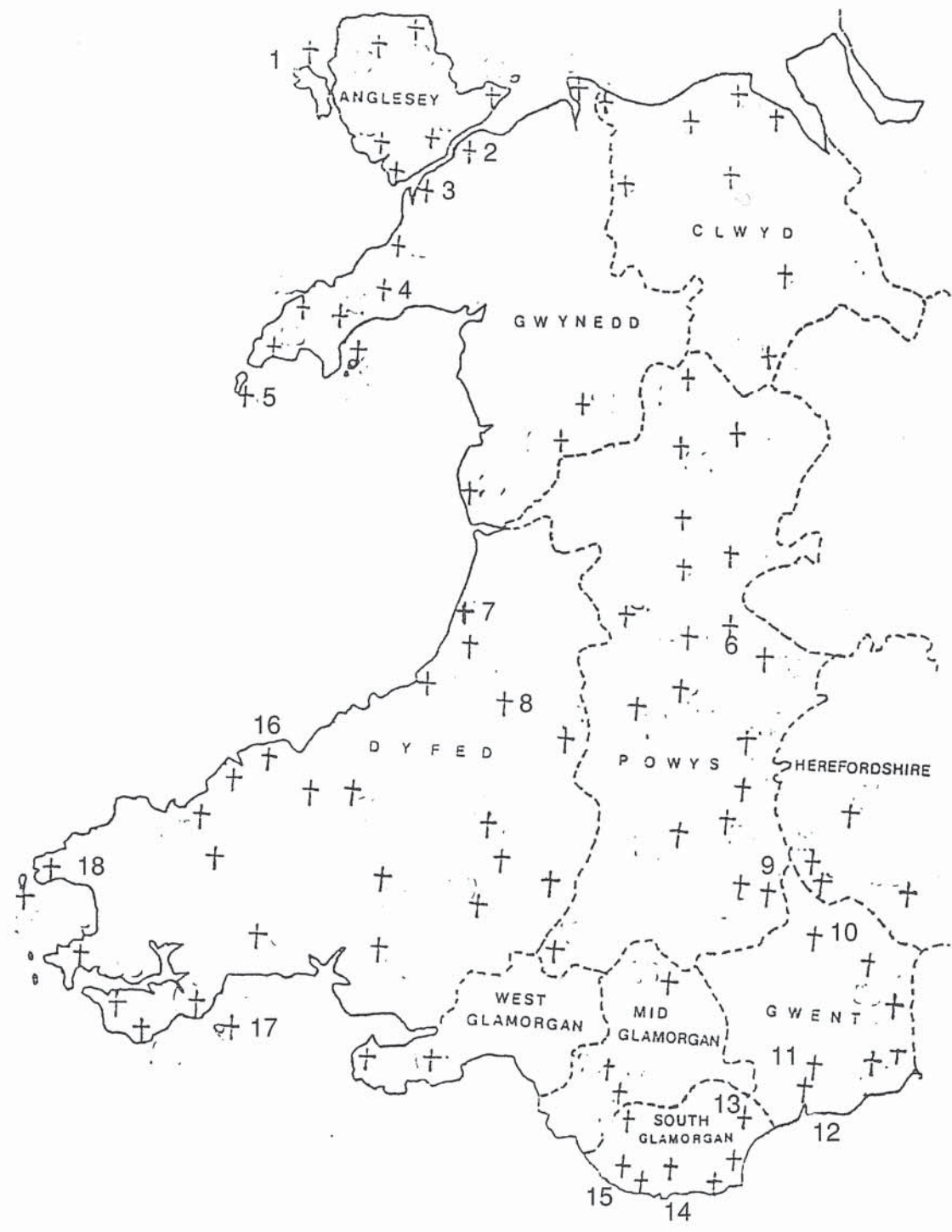
キネッサとヘレンの子孫たちからなる多くの聖人たちは、緑の大地と厳しい山並みの中に僧院を形成し、修行と農耕の共同生活を送り、ウェールズ各地を巡ってキリスト教の布教活動を行なった。彼らの癒しの奇跡は、聖なる川や泉の伝説として語り継がれ、各地に彼らの名を冠した教会堂が建設されて、次第にウェールズの庶民の英雄となってゆく。そしてまた庶民の求めるアルスル像は、ウェールズに伝えられる民話に描かれているように、洞窟の中で永遠の眠りについていて、必要とされるとき目覚める戦士たちの長としての姿をとっている。

こうして、聖人とアルスル、ウェールズの庶民の中に生きつづける二つの英雄像は、共に一つのイメージ、すなわち自分たちの国には、癒しの奇跡を行い、国の危急存亡のときには必ず帰ってくる人物が存在するという確信となって、彼らの待望の思想を形作っているのである。

参考文献

1. Baring-Gould, Sabine & J. Fisher, *Lives of the British Saints*, 4 vols. (London: Honourable Society of Cymmrodorion, 1907-13).
2. Barron, W. R. J. (ed.), *The Arthur of the English* (Cardiff: University of Wales Press, 1999).
3. Bowen, E. G., *The Settlements of the Celtic Saints in Wales* (Cardiff: University of Wales Press, 1954).
4. ———, *Saints, Seaways and Settlements in the Celtic Lands* (Cardiff: University of Wales Press, 1969).
5. Bromwich, Rachel (ed.), *Trioedd Ynys Prydein; The Welsh Triads* (Cardiff: University of Wales Press, 1961, 2nd edn. 1978, 3rd edn. 1998).
6. ——— & A. O. H. Jarman & B. F. Roberts (eds.), *The Arthur of the Welsh* (Cardiff: University of Wales Press, 1991).
7. Chadwick, Nora K. (ed.), *Studies in Early British History* (Cambridge: Cambridge University Press, 1954).
8. ———, *The Age of the Saints in the Early Celtic Church* (London: Oxford University Press, 1961).
9. Collingwood, R. G. & J. N. L. Myres, *Roman Britain and the English Settlements* (Oxford: Clarendon Press, 1937).
10. Doble G. H., *Lives of the Welsh Saints* (Cardiff: University of Wales Press, 1971).
11. Evans, K. M., *A Book of Welsh Saints* (Penarth: The Church in Wales Provincial Council for Education, 1959).
12. Henken, Elissa R., *The Welsh Saints — A Study in Patterned Lives* (Cambridge: D. S. Brewer, 1991).
13. Jones, T. Thornley, *Saints, Knights and Llannau* (Llandysul: Gomer Press, 1975).
14. Leatham, Diana, *The Story of St. David of Wales* (London: Garramay (Wales) Ltd., 1952).
15. Rees, W. J., *Lives of the Cambro—British Saints* (London: Longman & Co., 1853).
16. Spencer, Ray, *A Guide to the Saints of Wales and the West Country* (Lampeter: Llanerch Enterprises, 1991).
17. Stephens, Meic (ed.), *The Oxford Companion to the Literature of Wales* (Oxford: Oxford University Press, 1986).
18. ———, *The New Companion to the Literature of Wales* (Cardiff, 1998).
19. Wade-Evans, A. W. (ed.), *Life of St. David* (London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1923).

ウェールズにおける僧院跡、並びに聖人関連地図



(注)

1. ホーリーヘッド (Holyhead) (カエル ゲビイ (Caer Gybi))、アングルシー (Anglesey)、[聖ケビイ (St Cybi) 関係].
2. バンガー (Bangor) (バンゴール・ヴァウル (Bangor Fawr))、グウィネッズ (Gwynedd)、[聖デイニオル (St Deiniol) 関係].
3. カナーヴォン (Caernarfon)、グウィネッズ (Gwynedd)、[ヘレン (Helen) とペブリィグ (Pebblig) 関係].
4. スァンゲビイ (Llangybi)、グウィネッズ (Gwynedd)、[聖ケビイ (St Cybi) 関係].
5. バーゼイ・アイランド (Bardsey Island) (イニス・エンスイ (Ynys Enlli))、グウィネッズ (Gwynedd)、[聖カドヴァン (St Cadfan) & その他関係].
6. スァンバダルン・ヴェネッズ (Llanbadarn Fynydd)、ポウイス (Powys)、[聖バダルン (St Padarn) 関係].
7. スァンバダルン・ヴァウル (Llanbadarn Fawr)、ダヴェド (Dyfed)、[聖バダルン (St Padarn) 関係].
8. スァンデウィ・ブレヴィ (Llandewi Brefi)、ダヴェド (Dyfed)、[聖デイヴィッド (St David ((デウィ・サント、(Dewi Sant)) 関係].
9. スァンガトック (Llangattock)、ブレイコン (Brekcon) 近郊、ポウイス (Powys)、[聖カドク (St Cadoc) 関係].
10. スァンエレン (Llanellen)、グウェント (Gwent)、[カナーヴォンの聖ヘレン (St Helen of Caernarfon) 関係].
11. カエルレオン (Caerleon)、グウェント (Gwent)、[アーロン (Aaron)、ドゥブリシィアス (Dubricius)、テイロ (Teilo) 関係].
12. ニューポート (Newport)、グウェント (Gwent)、[グラディス (Gwladys) & グウェンスイウ (Gwynllyw) 関係].
13. スァンダフ (Llandaff)、南グラモルガン (S. Glamorgan)、[ドゥブリシィアス (Dubricius)、テイロ (Teilo) 関係].
14. スァンカルヴァン (Llancarfan) (ナント・カルヴァン (Nant Carfan))、南グラモルガン (S. Glamorgan)、[聖カドク (St Cadoc) 関係].
15. スァントウィット・メイジャー (Llantwit Major) (スァンイスィテッド・ヴァウル (Llanilltud Fawr))、南グラモルガン (S. Glamorgan)、[聖イスィティッド (St Illtud) 関係].
16. スァングラノグ (Llangranog) (スァングランノグ (Llangrannog))、ダヴェド (Dyfed)、[聖カランノグ (St Carranog) 関係].
17. カルディ・アイランド (Caldey Island) (イニス・ピイル (Ynys Pyr))、ダヴェド (Dyfed)、[イスィティッド (Illtud)、サムソン (Samson)、パイロ (Pyro) 関係].
18. セント・デイヴィッツ (St David's) (ティ・デウィ (Ty Dewi))、ダヴェド (Dyfed) [カラドク (Caradoc)、デイヴィッド (David)、ジュスティニアン (Justinian) 関係].